

『ケンゲキ オンラインスクール』の教育的効果について

—児童たちの感想文の比較分析から—

瀧川 淳

The teaching effectiveness of “Kengeki Online School”

Jun Takikawa

(Received September 30, 2020)

1. 問題の所在と研究の目的

本研究は2020年7月21, 27, 28日に公益財団法人熊本県立劇場のコンサートホールと熊本市内小学校の教室を結んで行われた『ケンゲキオンラインスクール ～音楽を知ろう聴こう』を鑑賞した小学校のうち、2校の5年生の感想を比較分析し、『ケンゲキオンラインスクール ～音楽を知ろう聴こう』の教育的効果を明らかにすることを目的とする。

2020年冬に全世界を襲ったCOVID-19の感染防止対策の一環として、2020年2月に内閣総理大臣によって全国すべての小中高校に臨時休校の要請が出されて、さらに4月16日には全国に緊急事態宣言が発令された。緊急事態宣言そのものは5月25日に全国で解除され、6月以降順次、学校は再開したようである。しかしながら未だ学校教育は大きな混乱の渦中にある。

音楽科においては、文部科学省が2020年9月に示した『学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル ～「学校の新しい生活様式」～(2020.9.3 Ver.4)』(文部科学省, 2020年, 46頁)で「音楽における『室内で児童生徒が近距離で行う合唱及びリコーダーや鍵盤ハーモニカ等の管楽器演奏』(★)」は、「レベル3地域においては『感染症対策を講じてもお感染のリスクが高い』ことから、行わない」ようにするよう指示されている。またレベル2地域においては、「リスクの低い活動から徐々に実施することを検討」するとしているが、「(★)の付した活動については特にリスクが高いことから、実施について慎重に検討」すると明記されている。

この通達に基づいた各教育委員会からの指示等により音楽の授業は現在でも新型コロナウイルス以前のようには歌えない・演奏できない・合唱/合奏ができないという状況が続いており、鑑賞や楽器類を使用しない音楽づくり(創作)の活動が主に展開されている。さ

らに先に挙げた臨時休校の結果、いわゆる主要5教科の授業時間数確保のために、音楽科の授業は削減されていると聞く。

このような現状にあって、児童たちの音楽的な学びの保障が急務であることは言うまでもない。そこで筆者は先に挙げた『ケンゲキオンラインスクール ～音楽を知ろう聴こう』を熊本県立劇場と共に企画し主催した。

2. 研究の方法

『ケンゲキオンラインスクール ～音楽を知ろう聴こう』に参加した小学校から2校を選び、鑑賞した児童の感想文を比較分析することで、本企画の教育的効果を検証する。

本研究で分析の対象としたは、熊本市内のH小学校とI小学校の小学5年生である。感想文回収の数はそれぞれH小学校が64件、またI小学校が58件である。なお、これは事前に筆者が依頼した感想文ではなく、鑑賞した学校の担任や音楽専科教諭が自主的に児童たちに書いてもらったものを調査の目的でいただいた。したがって、感想文(ワークシート)の項目も異なるが、本研究ではその中で、H小学校は「『ケンゲキオンラインスクール』を鑑賞して」、またI小学校は「質問・感想などがあれば書いてください」という設問について分析を行う。

自由記述の分析は、テキストマイニング(計量テキスト分析)によるが、分析のためのソフトはKH Coder Ver. 3を使用する。

3. 『ケンゲキオンラインスクール ～音楽を知ろう聴こう』とは

『ケンゲキオンラインスクール ～音楽を知ろう聴こう』(以下、オンラインスクールと略記)は、公益財団法人熊本県立劇場の主催、熊本市教育委員会、な

らびに熊本大学大学院教育学研究科の後援で2020年7月21, 27, 28日に開催された(実施報告の詳細は、熊本大学附属教育実践総合センター『熊本大学教育実践研究』第38号(2021年2月刊行予定)に掲載予定のため、そちらをご参照いただきたい)。

本企画は、主に県内在住のプロフェッショナル演奏家に演奏を依頼し、熊本県立劇場コンサートホールで演奏してもらい、それをYouTube Liveを通して、参加した熊本市内の小学校の各教室へリアルタイムで配信する、というものである。その際、児童たちが実際に鑑賞している様子を演奏者が感じ取れるようにするため、Zoomを通してコンサートホールへ送信するよう学校側に依頼した。

筆者は、本企画の発案、監修を行い、また全公演の司会進行をつとめた。留意点としては、各公演の演奏曲は必ず教科書に掲載されている楽曲を取り上げた。その他の楽曲は、基本的に演奏者側から提案してもらったが、教科書教材と関わりが持てる選曲を事前に依頼した。学校側へは、事前に進行表や楽曲解説を配布し、また各演奏会の学習上のねらいやプログラム構成の意図を合わせて提示した。そうすることで、各校、先生方が個別に事前事後学習やプリントなどを用意し、本企画が児童たちの学習のひとつとして位置付けることができたようである。

4. 『オンラインスクール』の実施方法

本企画は、児童が各学校の教室で鑑賞できる。各回は30分で構成された。

各教室はタブレット(熊本市の小学校にはLTE対応のApple社製iPadがすでに配置されている)を用いて事前に送付されたアドレスを入力することでYouTube Liveに接続する。またタブレットは各教室に配置された大型テレビに接続し、タブレットの画像を大型テレビへと映し出していた。これが鑑賞に必要な最低限のセッティングであるが、中には音楽室で鑑賞し大きなスピーカーに繋ぎ、よりよい音質で鑑賞した学校もあったと聞く。

コンサートホールでは、ビデオ配信業者に委託し、初日は計3台のビデオカメラ(センター, 下手上手), 2, 3日目は計4台(センター, 下手上手に加え、ステージ後ろから客席を見渡せるアングル)のビデオカメラを用いて、演奏中の演奏者の様々なアングル(全体や手元のみ等)を撮影できるようにした。また単に演奏を聴かせるだけでなく、司会(筆者)を入れ、曲の簡単な構造の説明や紹介なども行い、さらに演奏者たちにも演奏者の視点からそれぞれの曲の聴きどころや楽器について話をしてもらうことで、児童たちには聴

きどころをある程度焦点化してもらった。

以下(表1)は、各回のプログラムと曲目である。

表1 ケンゲキオンラインスクールのプログラム

7/21 低学年プログラム
曲目： ①『ラデツキー行進曲』(シュトラウス1世) ②『行進曲』(チャイコフスキー) ③『トルコ行進曲』(モーツァルト) ④『メヌエット』(ベツォルト) ⑤『ミッキーマウスマーチ』(ドッド)
演奏：ピアノデュオ/谷脇裕子, 柴田遥子
7/21 日本の伝統音楽プログラム
曲目： ①『春の海』(宮城道雄) ②『「さくら」より主題と6つの変奏』(藤井凡大) ③『パプリカ』(米津玄師)
演奏：小路永和奈(箏), 藤山雅弘(尺八)
7/27 中学年プログラム
曲目： ①『メヌエット』(ベートーヴェン) ②『クラリネット・ポルカ』(作曲者不詳) ③『チャルダッシュ』(モンティ)
演奏：黒葛原康子(ヴァイオリン), 春日香南(クラリネット), 吉田秀晃(ピアノ)
7/28 高学年プログラム
曲目： ①『ハンガリー舞曲』第5番(ブラームス) ②『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』第1楽章(モーツァルト) ③『プリンク・プランク・プルンク』(アンダーソン)
演奏：黒葛原康子, 田中唱(ヴァイオリン), 黒木奈津美(ヴィオラ), 原田哲男(チェロ)

5. 児童たちの感想に基づく分析

5.1 分析データの概要

本稿では、熊本市内のH小学校とI小学校の小学5年生が書いた感想をもとに、オンラインスクールの

教育的な効果を検証する。

5年生が鑑賞したのは、3. に示した弦楽四重奏によるプログラムである、『ハンガリー舞曲』第5番を演奏する前には前半と中間部の旋律の違いや冒頭の旋律と伴奏の違いを説明してから鑑賞した。また『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』では、冒頭の旋律がトゥッティであることを伝え、まずそれぞれの楽器の簡単な説明を交えて冒頭を演奏してもらい、それからトゥッティで演奏することで、個々の楽器の音色や合わさった時の音色に着目させた。また1楽章を演奏した後に、楽曲名の日本語訳が「小さな夜の音楽」であることを伝え、タイトルによりふさわしいと思われる第2楽章の冒頭を演奏してもらった。最後の『プリンク・プランク・プルンク』では、弦楽器は弓で弾く以外に指で弾くこともできることを実演してから演奏してもらい、という流れで構成された。

考察の対象としたのは、H小学校5年生の感想64件と、I小学校5年生の感想58件である。H小学校では「『ケンゲキオンラインスクール』をかんしょうして」との設問に児童が自由に記述した。またI小学校では、音楽専科教諭が事前にプリントを作成して、そのプリントに記入しながら最後に振り返りとして「質問・感想など」を記すスペースに児童が自由に意見を記述するようになっている。本論では、この「質問・感想など」に記された内容を考察の対象としている。ちなみに、このプリント（I小学校）では、そのほか、事前学習として①楽器の名前と特徴、②クイズ形式で弦楽器全般の特徴を学ぶことができるようになっており、また曲目や演奏者、編成なども明記され、振り返りとしてミニテストと「質問・感想など」を記入するスペースが設けられていた。オンラインスクールでは事前に進行表や学習のねらいを配布したことで担任や音楽専科もこれに基づいてそれぞれの現場の状況に合わせて授業へと位置付けることができたのではないだろうか。

5. 2 分析の方法

児童たちから得た122件の自由記述データ（「資料」参照）は、KH Coder Ver. 3を使用して計量テキスト分析を行った。まず入力したデータをKH Coderに読み込み、児童たちの文章の形態素解析を行い、表記の揺れ等を統一した。今回は、その後、各校別に同じ条件で使用された言葉の頻出度と言葉の共起性を比較し、オンラインスクールにおける学びの特徴を明らかにしていきたい。

5. 3 H小学校における5年生の感想の分析

まず児童たちが書いた64件の感想には270文章が

含まれ、品詞別に抽出された語は5272語、そのうち分析に使用した語は2006語であった。これら抽出語のうち、頻出した回数が10回以上のものが表2である。

表2 H小学校児童の感想で10回以上頻出した語

抽出語	出現回数
音	83
曲	76
思う	75
音楽	44
アイネクライネナハトムジーク	39
聞く	39
指	32
美しい	29
バイオリン	29
プリンクプランクプルンク	26
夜	26
楽器	24
知る	24
聞	23
ハンガリー舞曲第5番	20
楽しい	20
演奏	19
チェロ	17
ピチカート	17
感じ	14
ビオラ	12
好き	12
最初	11
初めて	11
見る	10
元気	10
今日	10
大きい	10
低い	10
明るい	10

またこの頻出語に対して、共起分析を行った結果が図1である。分析にあたっては、最小出現数を10に設定している。また描画する共起関係の絞り込みは、描画数を30に設定している。

H小学校では、鑑賞前の事前学習は行われず、オンラインライブを純粹に楽しむ形で鑑賞が行われ、児童たちが鑑賞後の自由に感想を書いていた。

これらの結果から、H小学校の児童たちにとっては、モーツァルト作曲「アイネ・クライネ・ナハトムジーク

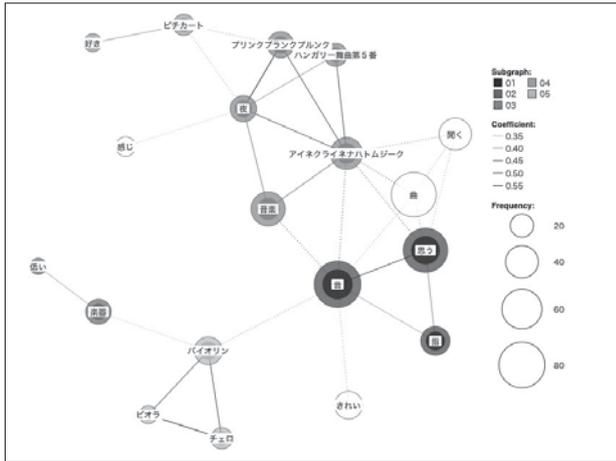


図1 H小学校児童の感想より
(10回以上頻出した語の共起ネットワーク)

ク], アンダーソン作曲「プリンク・プランク・プルンク」, ブラムス作曲「ハンガリー舞曲第5番」の順に言及されていることがわかる。しかし共起ネットワークを見る限り、それぞれの曲想については「プリンク・プランク・プルンク」で演奏されたピチカートに対して多くの児童たちが興味関心をもったことが現れている。「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」に関する「夜」については、司会である筆者が日本語タイトル（「小さな夜の音楽」）を提示し、それによりふさわしい2楽章の冒頭を演奏したことからより印象に残ったと考えられる。また楽器についてもヴァイオリン、ビオラ、チェロと当日演奏された楽器全ての記述があることから楽器への興味関心も映像のライブならではの一定の効果があったとみて良いと考えられる。なお、楽器に関連して「低い」との意見があるのは、チェロの音色の低さに興味を持つ児童がいると同時に、ヴァイオリンの高い音に対してチェロの音の低さに驚く児童が多かったからだろう。その他3曲通して聴いて、音が高くなったり低くなったりする変化について興味を持ったという発言もみられた。ネット回線を通して大型テレビからの音声にもかかわらず、音がきれいであったと指摘する児童たちが多かったことも特記してもよいだろう。

5. 4 I小学校における5年生の感想の分析

次にI小学校5年生の児童たちが書いた58件の感想には277の文章が含まれ、品詞別に抽出された語は4635語、そのうち分析に使用した語は1718語であった。これらの抽出語のうち、頻出した回数が8回以上のものが表3である。

またこの頻出語に対して、共起分析を行った結果が図2である。分析にあたっては、最小出現数を8に設定している。また描画する共起関係の絞り込みは、描

表3 I小学校児童の感想で8回以上頻出した語

抽出語	出現回数
思う	69
プリンクプランクプルンク	47
音	45
曲	44
アイネクライネナハトムジーク	42
演奏	36
指	31
聞く	31
楽器	22
バイオリン	21
チェロ	20
きれい	18
ハンガリー舞曲第5番	17
ピチカート	17
好き	15
楽しい	14
知る	14
今日	12
音楽	11
ありがとう	10
弓	10
いろいろ	9
リズム	9
残る	8
使う	8
初めて	8
大きい	8
低い	8

画数を30に設定している。

I小学校では、先に述べた通り、プリントを用いての事前学習を行っており、また「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」に関してはすでに学んでいることが児童の感想から伺える。オンラインスクールに対するお礼も多く見られるが、これは担任や音楽専科の指導が入っているためと思われる。

さて、曲目については「プリンク・プランク・プルンク」への言及が最も多く、次いで「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」と「ハンガリー舞曲第5番」の順になっている。「プリンク・プランク・プルンク」と「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」については共起関係も強く、両方の楽曲を指摘した児童が多いことがわかる。また「プリンク・プランク・プルンク」に関わっては、H小学校の児童たちと同じように楽器

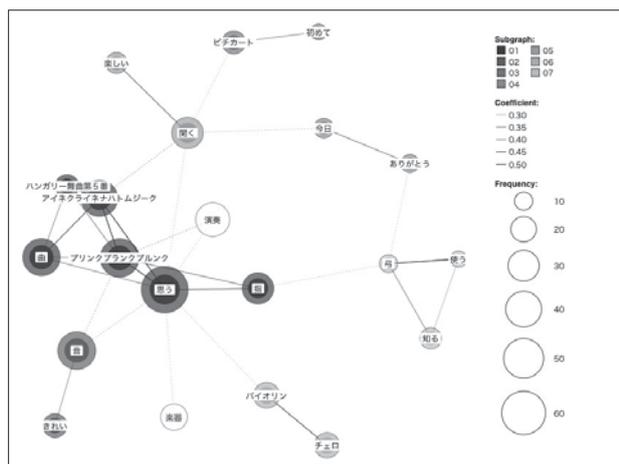


図2 I小学校児童の感想より
(8回以上頻出した後の共起ネットワーク)

を弓ではなく指で演奏する姿や、この奏法から表現される響きに興味関心を持っていることが明らかになっている。楽器に関しては、ヴァイオリンとチェロの興味が大きかったようで、この図には現れていないが特にチェロは演奏者の演奏する様子への言及なども見られ、この楽器に憧れを持った児童が少なからずいたことがわかる。加えて、ここには現れていないのだが、児童たちは長調短調の勉強をすでにしており、またプリントにもそれを問う設問があり、これらの曲（特に「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」）が長調なのか短調なのかを訊ねる質問もいくつか見られた。

5. 5 2つの小学校の感想を比較して

2校の感想を比較すると、まず担任もしくは音楽専科の指導内容の違いがあることが明らかとなっている。I小学校では事前の学習の内容や、それ以前に聴いた「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」についての言及が多く、また今回のオンラインライブによってそれまでの学びが深まった様子を伺うことができる。一方、H小学校では、オンラインライブ中に司会や演奏者が解説した内容と演奏を結びつける感想が多くみられた。

2つの学校の児童の学びに共通して突出している点は、「プリンク・プランク・ブルンク」の奏法（指で演奏するピチカート）への興味関心である。これは、この楽曲が最後の曲目であったこと、またそれまでに弓で弾く曲を2曲鑑賞していることで比較聴取して際立ったと考えられる。また司会者の進行によって、弦楽器の奏法には弓で弾く以外に何か奏法があるのかと演奏者に問いかけ、それに対して演奏者が指で弾くピチカートを紹介していることから、児童たちの興味を引いたのではないだろうか。多くの児童がまず弓以

外で演奏できることに驚き、また指で演奏した時の音色の違いに言及している。

演奏や聴こえてくる音響に関して、「きれい」だったと答えた児童が両校に見られたことは、プロフェッショナルとして活躍する演奏家たちの演奏はもとより、それを配信する上で音響を担ったスタッフの技術もあるだろう。オンラインライブを開催する上で、いくつかの配信媒体を試し、何度か試行錯誤を重ねて、音質や画質に関してはYouTube Liveが最も良いという結論に達し、YouTube Liveによる配信を行なった。とはいえ、最高の画質音質設定にして配信すると演奏者の実際の演奏と、学校での鑑賞の間に40秒から1分のディレイが生じた。画質を落とすことでディレイを極力少なくしたが、それでも双方向的なやりとりは諦めざるを得なかった。その中で児童たちが、演奏や音響に関してこのような評価を両校から確認できたことは、本企画が鑑賞授業の教材として十分に耐えうる質を保証しているということになるだろう。

6. おわりに

本論では、7月に熊本県立劇場主催で開催された「ケンゲキ オンラインスクール ～音楽を聴こう知ろう」を鑑賞した小学校のうち、2校の5年生の感想を比較することで、本企画がどのような学びにつながったのか、また授業の一環としての学びがどのように位置づけられたのかを検証した。

具体的には、オンラインライブで演奏された3曲において、各校どのような視点で学びが見られたのか、また両校に共通する学びはどんなものであったのかを明らかにした。児童たちの感想からは、弦楽四重奏の響きや楽器個々の響きはもとより、奏法への気付きが多くみられた。これは、いわゆる演奏会のようにただ演奏するだけでなく、各曲の解説や各曲のつながりを実演を交えながら行い、また演奏中も4つのカメラでアングルを適宜変えながら鑑賞できたことが大きな要因と言えるのではないだろうか。一方、各曲では所要所の実演を交えながら、簡単な音楽の構成についても解説を行なったのだが、それらについての記述は今回抽出した語からは見られなかった。

今後の課題としては、今回取り上げていないより小さな抽出語を含めて各曲の学びがどのようなものであったのかを明らかにしたいと考えている。今回取り上げた抽出語においても2校で共通する語が、固有名詞以外にも多数見られる。今後、より包括的な考察を加えて、オンラインスクールを鑑賞した児童の学びへと迫りたい。

